



写真1 掖上罐子塚古墳空中写真

ふるさと御所 文化財探訪

其の三十四

古墳時代〈22〉
葛城氏の盛衰
(11)

葛城本宗家の
滅亡①

文化財課

☎60-1608

昨年6月号〜7月号で記したとおり、葛城氏には北葛城を本拠にした葦田宿禰系葛城氏と、葛城襲津彦以来、南葛城を本拠にした玉田宿禰系葛城氏があります。うち葛城襲津彦↓(名欠)↓玉田宿禰↓円大臣と続

く系統が主流とみなされており、これを葛城本宗家と呼んでいます。天皇家の外戚としても強大な勢力を誇った葛城本宗家ですが、まさに盛者必衰の理のとおり、その滅亡は意外なほどあつけないものでした。

日本書紀によるとその発端は、安閑天皇と皇后の会話を偶然耳にした幼少の眉輪王が、天皇を父の仇と知り、その昼寝中に刺し殺してしまつたことにあり、眉輪王らは葛城の円大臣の館へ逃げ込みます。やがて安閑天皇の弟の大泊瀬皇子(のちの雄略天皇)の率いる軍隊が館を取り囲み、眉輪王たちの身柄引き渡しを要求しますが、円大臣は堂々の正論によりこれを拒否します。そして娘の韓媛と葛城の宅七区(古事記では五处屯倉)を差し出すことにより許しを請おうとしますが、大泊瀬皇子は許さず、ついに火を放つたため、円大臣と眉輪王らは焼死し、その骨は見分けることさえできなかったといわれています。そこでこれを一つの棺に入れて新漢の槻本の南の丘に合葬したと伝えるのです。

新漢の槻本が果たしてどこなのかは判然としません。しかし6月号で紹介した埼玉稲荷山古墳の辛亥銘鉄剣の辛亥は西暦471年で、その銘文にある獲加多支鹵大王とは雄略天皇のことですから、この事件はその直前に起こったこととなります。

その時期に合致する掖上罐子塚古墳(写真1)は墳長14.9mの前方後円墳で、室宮山古墳に比べると墳丘規模の縮小が著しくなっています。この時期、百舌鳥・古市古墳群などでは墳丘は巨大化するのにもかかわらず、逆の流れをたどるのには特殊な状況を考慮する必要があるように思われます。

掖上罐子塚古墳の墳丘については帆立貝形古墳と評価する研究者もあるように前方部が短く、築造にあつて規制が加えられたと考えられます。濠も同一水面では巡らないし、また、奈良盆地側からは比高わずか10mほどの須坂峠を越えた位置に占地しており、これだけの規模の前方後円墳でありながら奈良盆地を一望することができず、どの方向に対しても眺望の利かない山地形の谷間に築造されているという立地の特異さは、隠蔽されて築造された古墳との印象さえ与えます。したがってわたしは、掖上罐子塚古墳こそ円大臣や眉輪王らの非業の死に相応しい奥津城だと思っています。

【参考文献】拙著「明日香・南葛城地域の古墳」『大和の古墳』I(『新近畿日本叢書 大和の考古学』第2巻)、2003年、人文書院

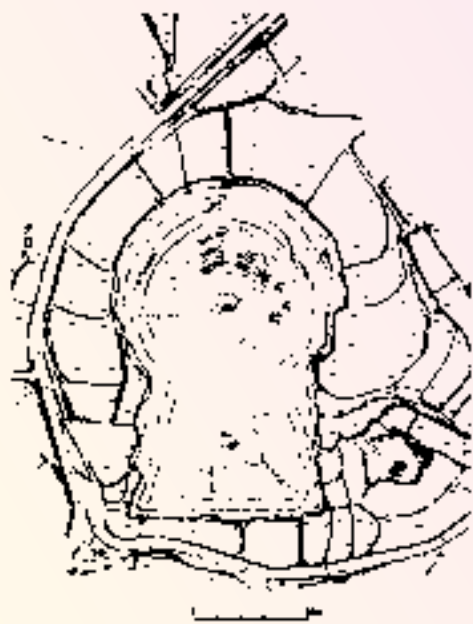


図1 掖上罐子塚古墳測量図



写真2 掖上罐子塚古墳出土 金銅装帯飾金具
(転載許可：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)

(文責 藤田和尊)



2011. 8